

# 富士河口湖町との地域包括連携における大学の役割

(平成22年度)

## 地域連携推進委員会

石 黒 友 康      坂 本 宏 史      成 田 崇 矢  
中 村        雄      坂 井 一 也      佐 藤 真 一  
山 崎 百 子      渡 辺 裕 一      入 江 多 津 子  
                 牧 野 順 四 郎      小 佐 野 朗

## Roles of the university in community collaboration between Fujikawaguchiko Town and Health Science University

Tomoyasu Ishiguro, Hiroshi Sakamoto, Takaya Narita,  
Takeshi Nakamura, Kazuya Sakai, Shinichi Sato,  
Momoko Yamazaki, Yuichi Watanabe, Tazuko Irie,  
Junshiro Makino, Akira Osano

### 抄 録

官民共同の町づくりを求められる現代においては、大学と地域は、研究・教育面における交流をはじめとして、地場産業の活性化や「まちづくり」に代表される地域活動などの様々な分野において、連携し協力し合うことを強く期待されている。

従来から各学科・個人と個別に連携を図っていたそれぞれの「地域連携」が、町と大学との「包括的連携協定」の運びとなった。そこで、大学は富士河口湖町から提供されている、町をキャンパスとして多くの学生が学んでほしいという趣旨を享受し、多くのことを町から学び、福祉社会の現実、リハビリ・医療の現実、福祉の困難さを学び取り、目指すべき自分達の社会の構築の一助となれば、幸いである。

大学の役割は、学問が実践に役に立つものであるべきであるという側面と、大学に求められる新たな価値の創造・開発という側面がある。地域連携推進委員会はこの連携に至るまでの経緯と大学の役割を模索することが役割と考えた。

キーワード：地域連携講座

包括的連携協定

地域連携推進委員会

大学の役割

## 1 はじめに

富士山のふもとにある富士河口湖町（以下「町」と略）は、富士山の噴火によりせき止められた富士五湖のうち河口湖、山中湖、西湖、精進湖と4湖を有し、富士山と湖のリゾートの町である。人口は約2万5千人、世帯数は約9000世帯の自治体である。しかしながら、夏季には富士登山に約23万人の外国人を含め、大勢の人々が訪れ、別荘も多くわが国有数のリゾートの町である。そのような立地の中で、健康科学大学（以下「大学」と略）は町にただ一つの大学で町と共存共栄の社会を創っている。

官民共同のまちづくりを求められる現代においては、大学と地域は研究・教育面における交流をはじめとして、地場産業の活性化や「まちづくり」に代表される地域活動などの様々な分野において連携し協力し合うことが強く期待されている。文部科学省は「平成20年度文部科学白書」において、大学は地域の「知の拠点」としてそれぞれの地域における社会・経済・文化の発展に貢献することが期待され、「大学には、大学で生み出された又は大学に蓄積された知的資源を広く社会に提供していく役割がある」と大学と地域社会は、研究・教育の両面における連携を強化し、活発な相互作用を通じ、双方が進化していく必要があるとする改革の新たな方向性を打ち出している。こうした社会状況と国の方針をベースに、富士河口湖町民の生涯学習の観点から、「健康科学大学 地域連携講座」（以下「連携講座」と略）（表1）を開設した。

その講座の展開はきわめて重要な今後の布石であり、これを契機として、従来から個別に各学科・個人と連携を図っていた「地域連携」が町と大学との包括的連携に発展した。

表1 平成21年度 健康科学大学 地域連携講座

回	日 時	テーマ
1	7/11(土)	障害児をもつ母親への支援
2	7/25(土)	児童虐待について
3	8/8(土)	高齢者の健康づくり
4	9/5(土)	発達段階と心の悩み
5	9/26(土)	介護方法の実際 ～体の動かし方・車いすの使い方～

## 2 目 的

町と大学の地域包括連携までの道のりをまとめることは、今後の大学の在り方に重要な意味があり、当大学の目指すべき課題の発見にもつながることが考えられる。

## 3 地域包括連携までの道のり

大学はかねてより、地域福祉の向上、地域経済の活性化、自然・文化環境の改善及び人材育成を目的に、町との地域連携を考えてきた。その試みとして、平成21年度には町の主催で健康科学大学との地域連携講座を5回シリーズで行った。これは、教員・学生・町の職員の一一致協力を得たことで、大盛況のうちに終わった。その後、大学と町の協力関係がさらに進み、平成21年度末には町と大学の間で健康科学大学地域連携講座推

進委員会が発足し、具体的な連携事業の企画立案・実施のため、町と大学共同の組織が出来上がった。

これを受けて平成22年3月24日、健康科学大学と富士河口湖町との間で「包括連携協定」が正式に結ばれた。

#### 1) 包括連携協定の調印式について

町と大学が今後とも積極的連携を図るために「包括連携協定」の調印式が行われ、その調印式の状況は地元の新聞や富士河口湖広報にも掲載され、翌月の4月にはその記念として、約80本の桜の記念植樹を行った。

具体的には、大学構内緑地、富士河口湖町立公園に、午前と午後、すべての学生が参加できるよう、二部制で記念植樹祭を行い、町長、学長、学生それぞれが桜の植樹を行った。町長の挨拶の中で、「地域に根ざした大学に成長する」という希望が互いに再確認され、ますますの町と大学の互いの発展が祈念された。（資料1）

その後、様々な面で、町と大学との連携が始まったことはいうまでもない。

#### 2) 学内の地域連携推進委員会の設置

町と大学は、協働で連携を推進するため、スムーズに連携が図られるように、健康科学大学地域連携講座推進委員会規約（資料2）と組織図が作成された。この連携に関しては、教授会で了承が得られ、正式に健康科学大学地域連携講座推進委員会の発足を得た。

共同の地域連携推進委員会には、各学科2名の教員が委員として選出され、町との調整を行った。また、学部長・学科長は顧問としての役割を担い、全体的調整を図ることとなった。

その共同の委員会を受けて、学内で地域連携推進委員会が設置された。ここでは、毎月、連絡を含めた情報提供・共有と、各学科の連携に関する情報の交換や当面の問題の検討などがなされた。

平成21年度は3回の地域連携推進委員会、平成22年度は10月までに6回の地域連携推進委員会が開かれた。

町との連携に関する情報は、地域連携推進委員会が一括して掌握することが確認され、それぞれの教員の役割が確認された。

## 4 地域連携講座について

この「地域連携講座」は町と大学が共同で企画する事業であり、その目的は、地域住民の健康・福祉・文化等の学習ニーズに応えることにより、住民の生活の質の向上と町の活性化を図ることにあると同時に、大学にとっても地域福祉・まちづくりに関する研究・教育に資するところにある。

そのため、「地域連携講座」を中心として、様々な部門で町との連携を図り、より密

資料1

平成22年4月21日



富士河口湖町・健康科学大学 包括連携協定記念植樹について

健康科学大学 学長 折茂 肇

健康科学大学はかねてより、地域福祉の向上、地域経済の活性化、自然・文化環境の改善及び人材育成を目的に、富士河口湖町との地域連携を考えてきました。その試みとして、昨年の夏には町の主催で健康科学大学との地域連携講座を5回シリーズで行いました。これは、教員・学生・町の職員の一致協力を得たことで、大盛況のうちに終わりました。

その後、大学と町の協力関係がさらに進み、昨年末には大学と町の間で地域連携講座推進委員会が発足し、具体的な連携事業の企画立案・実施のための組織が出来上がりました。

これを受けて2010年3月24日、健康科学大学と富士河口湖町との包括連携協定が正式に結びられました。

(大学ホームページより)

この包括連携協定を記念し、町と大学の更なる飛躍のために、記念としてさくらの木の植樹が計画されました。つきましては、下記の要領で、全学年・教職員をあげて、取り組んでまいりたいと思います。

学生の皆さんの積極的な参加を期待します。

記

- 1 期 日 : 平成22年4月28日(水)  
 【Ⅰ部】富士河口湖町内総合公園において(9:00~10:15)  
 【Ⅱ部】大学構内において(12:10~12:55)
- 2 対 象 者 : 全学生及び教職員
- 3 プログラム

【Ⅰ部】

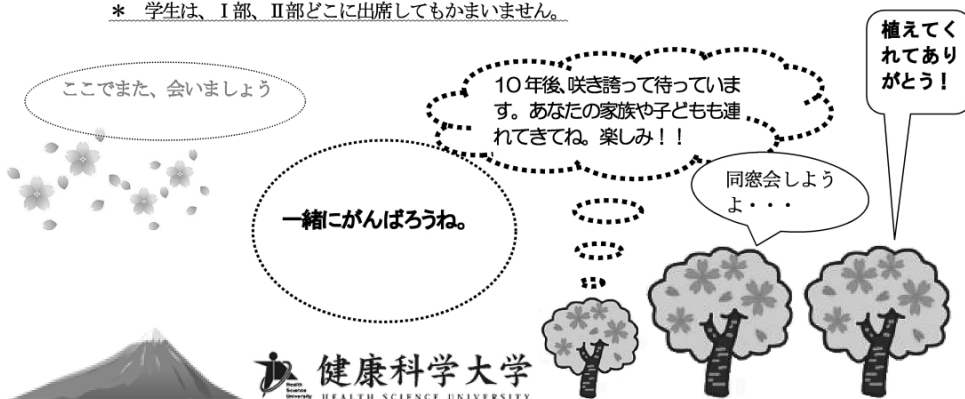
河口湖総合公園において(9:00~10:15)別紙	
【植樹本数 20本】	
9:00	学生・職員集合
9:05	植樹の開始宣言
9:10	町長より挨拶
9:25	学長より挨拶
9:40	植樹開始(町長・学長)
9:50	写真撮影(広報、新聞部)
9:55	各自植樹
10:15	解散

【Ⅱ部】

大学内において(12:10~12:55)	
【植樹本数 30本】	
12:10	学生・職員集合
12:15	植樹の開始宣言
12:16	町より挨拶
12:25	学長より挨拶
12:30	植樹開始(町長・学長)
12:45	写真撮影(広報、新聞部)
12:55	解散

\* Ⅰ部は、現地集合。解散後、大学までマイクロバスでの送りあり。

\* 学生は、Ⅰ部、Ⅱ部どこに出席してもかまいません。



資料2

## 健康科学大学地域連携講座推進委員会規約

（目 的）

第1条 富士河口湖町に健康科学大学地域連携講座推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。委員会は、健康科学大学と富士河口湖町が連携し地域住民の学習機会の拡充と地域での生涯学習の振興を図るため、講座の運営に関する事項を審議し、あわせてこれらについて富士河口湖町と大学の連絡調整を図ることを目的とする。

（構 成）

第2条 委員会は、次に掲げる者をもって構成する。

1. 委員会の委員は、本学の専任教員・事務職員・富士河口湖町職員から選任する。
2. 健康科学大学各学科から若干名
3. 富士河口湖町から若干名

（任 期）

第3条 委員の任期は、原則として2年とする。

なお、欠員を生じた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残留期間とする。

（所掌事項）

第4条 委員会は、次の各号に掲げる事項を掌握する。

1. 富士河口湖町と健康科学大学が実施する地域連携に関する事業の企画・立案等
2. 事業実施に対し必要がある場合、実行委員会を設けることができる
3. 学内外からの講師依頼、執筆依頼に関する事項
4. その他地域連携の関すること

（会議及び運営）

第5条 会議の運営は次のとおりとする。

1. 委員長は互選により選出する。
2. 委員長は、委員会を代表する。
3. 委員長は、委員会の会議を招集し、その議長となる。
4. 委員長に事故のあるときは、委員長の指名する委員がその職務を代行する。
5. 会議は、委員の3分の2以上の出席により成立し、議事は、出席者の過半数をもって決する。可否同数のときは、議長がこれを決する。
6. 委員長は、会議の運営上必要と認めるときは委員以外の者を出席させることができる。

（庶 務）

第6条 委員会の事務は構成委員が処理する。

（細 則）

第7条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

（改 正）

附 則1.この規程は、平成22年4月1日から施行する。

資料3

【15回用】

[全学科/専門基礎/福祉学]

科目名	必修 区分 選択	担当教員	単位数	履修年次	開講学期等
地域連携の理論と実際	選択	坂本 宏史 他	2	2・3・4	前期 (集中)
学習目的	地域連携における諸問題を学ぶことにより、今日的課題を的確に判断できるようになる。				
学習目標	① 富士河口湖町の地域特性や保健・医療・福祉分野等における課題や問題解決のための取り組みや具体的な活動について理解することができる。 ② 学生個々が主体的に考え、各々の立場から意見を明確に表明することにより、専門職としてのコミュニケーション能力を養い、さらに職種間連携についての学びを深めることができる。				
授業概要	保健・医療・福祉分野などを中心として、住民の持つ今日的課題を整理し、富士河口湖町と大学との連携により、適切な住民サービス提供のための課題や問題点を探り、地域に密着した大学のめざすべき姿を模索して行く。				
教科書	特に指定しない 必要時、担当教員の資料配布				
参考書	必要に応じて授業中に参考となる図書、資料を提示				
成績評価方法	全体100%として出席点75%、課題点25% で評価する。				
授業 計 画	第1回	オリエンテーション：「地域連携の理論と実際」の科目のめざすもの 保健・医療・福祉分野の連携教育の必要性			
	第2回	保健医療福祉分野における産学官の取り組み（政策） * 福祉のまちづくり（全体の概要） 富士河口湖町 政策局 職員 の講義			
	第3回	保健・医療・福祉分野における各地域の特色ある取り組みの実際と課題 富士河口湖町における健康・福祉の町づくり（保健医療福祉）の取り組みの現状と課題 I * 高齢者分野 富士河口湖町職員による講義			
	第4回	保健・医療・福祉分野における各地域の特色ある取り組みの実際と課題 富士河口湖町における健康・福祉の町づくり（保健医療福祉）の取り組みの現状と課題 II * 障害者分野 富士河口湖町職員による講義			
	第5回	保健・医療・福祉分野における各地域の特色ある取り組みの実際と課題 富士河口湖町における健康・福祉の町づくり（保健医療福祉）の取り組みの現状と課題 III * こども分野 富士河口湖町職員による講義			
	第6回	保健・医療・福祉分野における各地域の特色ある取り組みの実際と課題 富士河口湖町における健康・福祉の町づくり（保健医療福祉）の取り組みの現状と課題 IV * 観光分野 富士河口湖町職員による講義			
	第7回				
	第8回	富士河口湖町の具体的取り組み			
	第9回	「地域連携講座」への参加：富士河口湖町職員と共に企画、実施、評価の一連の事業に参加			
	第10回	6月から7月の（土）にかけて開催される「地域連携講座」に2回参加			
	第11回	富士河口湖町の地域特性を活かした具体的取り組みの方向 I 問題点や課題を解決するための具体的取り組みの提案 ① 富士河口湖町職員による			
	第12回	富士河口湖町の地域特性を活かした具体的取り組みの方向 II 問題点や課題を解決するための具体的取り組みの提案 ② 富士河口湖町職員による			
	第13回	プレゼンテーションとディスカッション I 担当教員 富士河口湖町 職員 住民 参加			
	第14回	プレゼンテーションとディスカッション II 担当教員 富士河口湖町 職員 住民 参加			
	第15回	まとめ 「連携とは」			
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できるだけ具体的課題を題材とした授業を展開する。</li> <li>・グループは3学科にわたるメンバー構成とする。</li> <li>・富士河口湖町には、必要に応じて町の実情等に関する資料を提示してもらおう。</li> <li>・住民の方々には、学生とともに授業に参加してもらい、ディスカッション等に加わってもらおう。</li> <li>・授業運営は「健康科学大学地域連携推進委員」が担当する。</li> </ul>				

なる連携を図ることが肝要である。地域連携講座は、町が開催主体であるが、大学においては平成23年度より、大学のカリキュラムの授業の中で、講座「地域連携の理論と実際」（資料3）を開設する予定である。この講座では、町の協力を得て、大学が実践にそった学問の提供を学生に図ることとなる。

以下、平成21・22年度の「健康科学大学地域連携講座」についての概略を述べる。

## 1) 「健康科学大学地域連携講座」の実施及び結果

### ① 平成21年度 連携講座について

開催までに数回に及ぶ町との打ち合わせを行い、表1に示されるプログラムを計画・実施した。町民が受講しやすい時期（季節）を考慮し、7月から9月までの期間で、時間的にも土曜日の午前、約1時間半、全5回の講座とした。

プログラムの内容については、町の希望と大学が提供できる人材を考慮しての企画であった。場所は、多くの市民に親しみのある、利便性のある町民会館が設定された。

当講座は初めての試みであり、実施に先立ち、富士河口湖町広報、ケーブルテレビでの案内放送、チラシなどを各部署・各所に配布することで、講座実施の周知が図られた。

スタッフは、町の生涯学習課の職員、大学の教員と学生ボランティアで構成し、講座の講師はすべて、大学の教員（ボランティア）で行った。実施に先立ち、学生ボランティアを募り、町民のための当日の受付、お茶の接待、会場の設営、光学機器の操作等の運営などに協力を求めた。スタッフと学生ボランティアは、初めての試行であるため、講座の実施後、毎回反省会を行い、次回の向上につなげていった。

結果として、初めての講座であったにもかかわらず、予想外に多くの町民が集まった。

講座への参加は、企画者側では、町の職員、大学教員、学生ボランティアなど、延べ88名で、一方、住民の講座への参加は総数224名であった。約半数が50歳～70歳まで、50歳～60歳が36%、60歳～90歳は25%であった。特に、第3回の講座には80歳～90歳までの方が9名参加され、テーマにより、熟年から高齢者の方の学習ニーズがあることを確認できた。受講者アンケート（自由記述）では、「大学の講義を聞いているようでとても良かった。」「とても良い勉強になりました。大変参考になった。他の人にも今日の話参考に話したいと思う。」といった感想や、「学生さんもよく研究している。学生さんの発表に考え深いものがありました。」「もっともっと講演を聴きたい。」などの意見がでた。さらに【良かったこと】を上回る【要望】の数々からも、住民の方々の学習ニーズの高さを知ることができた。各講座の講師に対する評価は、大学に対する地域の方々の期待や信頼を確信させるものであった。

しかしながら、初めての講座であり、準備不足も重なり、40歳以下の若い住民の参加が少なく、今後の検討課題であろうと思われた。大学が住民に親しく理解されるためにも、富士河口湖町を支える若い世代の参加が不可欠である。若者も包括できるような内

容とプログラムを作成することの必要性が示唆され、第2回目への課題とされた。

② 平成22年度 地域連携講座について

平成21年度の反省を踏まえ、平成22年度については、町の担当部署と健康科学大学・各学科の担当者が直接打ち合わせを行い、それを政策局が調整するという全体的なかかわりの仕組みに切り替わった。そのため、町の各課が抱える身近な課題に対応することが出来、表2のような、よりきめ細かい町のニーズに対応できる仕組みとなった。

結果として、各課ごとの対応であり、連絡がスムーズになされるか否かの懸念があったが、政策局が総括と調整を行い、混乱もなく、第2回目が実施された。

全体的な広報は政策局が行い、第1回目と同じく実施に先立ち、富士河口湖町広報、ケーブルテレ

表2 平成22年度 健康科学大学 地域連携講座

回	日 時	テーマ
1	6/19(土)	「こころの健康」を考える
2	7/3(土)	「みんなで目指そう転ばぬ生活」
3	7/17(土)	「身近にある依存」
4	7/24(土)	いがいと知らない！？ 良い運動ってどんなこと？

ビでの案内放送、チラシなどを各部署・各所に配布することにより、講座実施の案内がなされた。その後は、各課が個別に広報活動を行った。各担当課が実施する初めての講座であったにもかかわらず、多くの町民が集まった。

講座への参加は、町の職員、大学教員、学生ボランティアなど、延べ約60名で、一方、住民の講座への参加は、総数約500名であった。特に第2回目は、老人大学（老人大学172名出席）との共催で行われたため、会場も大ホール（さくやホール）となり盛況であった。全体的に見れば、50歳以下の参加者が約18%と昨年度よりも増加しており、50歳～70歳まで25%、70歳～90歳は約56%であった。特に、第2回の講座は老人大学との共催であったため、年齢的にも、65歳以上の高齢者が約90%を占め、90歳以上の方の参加も2名あった。受講者アンケート（自由記述）では、「老人に関する話が実にありがたかったです」「すべての依存についてももう少し幅広く知りたい」や「予防体操ありがとうございました」「よかったです。勉強になりました」などの意見がでた。さらに1回目と同様【良かったこと】を上回る【要望】の数々からも、住民の方々の学習ニーズの高さを知ることができた。各講座の講師に対する評価は、第1回目と同じく大学に対する地域の方々のニーズを具体的に知ることができた。

この平成22年度 地域連携講座を振り返ると、テーマにより、参加者の年齢層が異なり、このことは各課のニーズを満たしたのではないかと考えられる。特に、平成22年度の講座の第3回においては、「禁煙」という最も難しい課題の講座でもあり、また、本年の10月からはたばこの値上げも実施され、タイミング的にも良いテーマの設定ではなかったかと推察される。全体的に見ると、各課のニーズは「健康」というキー概念で統一され、老若男女すべての人が希望するニーズに対する課題であったと考えられる。その点、この講座は、現在、町が推進する「健康のまちづくり」の一環として寄与できたのではないかと考えられる。次年度も、この講座は継続される予定である。



上記の2回の「地域連携講座」から言えることは、町と大学の協働でそこに住まう住民や働く人の健康生活の獲得・維持・発展がなされれば、リハビリテーションの一端を担う大学の役割も果たせるのではないかと考える。

## 2) 地域連携講座の評価

2年にわたる「地域連携講座」が無事に終了したことは、大学と町の双方の担当者が、それぞれに所属する組織の中で風通しのよい働き方ができたことである。実施する者たちがそれぞれの立場で、十分に意見が言えたことである。

「地域リハビリテーション」の狙いは、地域の活性・再生化とも言われるが、地域住民（町民、大学の教職員、学生）が自らの力で再生し、地域自身で更なる生活の質の向上を図ることが出来れば、地域リハビリテーションの目的が達成されたといえるであろう。2年にわたる短い「地域連携講座」ではあったが、大学と町は目指すべき目的を共有した企画を検討することにより、「大学と地域社会は、研究・教育の両面における連携を強化し、活発な相互作用を通じ、双方が進化していく必要がある」という文部科学省発の理念をお互いが実践出来たと確信する。今後、住民の学習ニーズに応えられる「地域連携講座」にしていくためにも更なる検討が必要であることが示唆された。

町と大学というそれぞれに違った役割を持つ機関が同じ目的に向かって進むためには、連携が必要であることはいうまでもない。そして、連携とは双方の積極的な姿勢を意味する。

今後は、連携の双方の担当が「システムとしての連携」が存続できるように仕組みを作り上げ、継続を図ることが、最大の課題である。つまり、連携を組織の力にし、そして、最も大事なことは担当者を組織が支えるとともに、担当者も単独ではなく、組織的な働きをすることである。その個人を支える身近な組織や支援環境がなければ、連携は推進されにくいと言えるであろう。

21・22年度の講座のアンケートから、住民の評価としては、大学に寄せる期待の大きさが感じられた

## 3) 富士河口湖町における大学の具体的取り組みについて

大学が富士河口湖町との連携で関わったものについては、表3のとおりである。3学科がそれぞれの立場で、現在、どのような連携がなされているかがわかる。さらに今後は様々な面での、町と大学の連携が期待される。

## 4) ボランティアセンターとの連携

従来より、大学に色々なボランティア依頼が来ると、個別に対応されることが多かったが、平成21年、大学内にボランティアセンターが整備された。依頼のあったボランティアについては、ボランティアセンターで一括募集され、集約・調整される。平成21年から22年10月までの、富士河口湖町における学生ボランティア活動を整理すると、表

4のとおりである。ボランティアセンターが調整した活動先は、町、施設、団体など多岐にわたっている。

もちろん、従来から町と大学ではボランティアに関する連携が図られていたが、平成22年度には、富士河口湖町ボランティアネットワーク協議会が正式に設置された。そこでの大学と町と社会福祉協議会のため話し合い・連携がなされたことにより、多くの学生ボランティア活動が活発になったことは言うまでもない。後に富士河口湖高校のボランティアサークルも参加し、このネットワークは4者となった。「地域連携」においては、ボランティアセンターの果す役割は大きいと同時に、その協力を得ることが重要なことは言うまでもない。

#### 5) 地域包括連携における経費の支出について

現在、地域包括連携のために、正式に予算化されてはいないが、大学・学生が連携活動上、必要なものには、実費の費用が負担されている。平成23年度には予算化される予定である。

## 5 考 察

今後、町との連携が進むにつれて、「地域連携推進委員会」は大学にとっては大きな役割を担っていくであろうことが予想される。今後、大学、当委員会がどのような役割を担っていくべきかを、ここで考察をしていくことは重要なことであろう。

#### 1) 大学の今後のかかわり方—さらに求められる大学と町との連携

大学もキャンパスの中だけで学問をしている時代ではない。実際の社会の中で生かされてこそ、学問の使命があるのではないだろうか。教科書、指導書、マニュアル等で様々な事柄を学んでも、住民という個別的な生活者に適応させることが出来なければ、机上の空論ということになりかねない。その橋渡しをするのが、連携という仕組みであろう。生活や社会状況は刻々と変わり、大学においても、学問の中身も変化する。その変化に対応する柔軟な学問は、富士河口湖という町で生活している住民や町から大いに学ぶことができよう。そのためには、富士河口湖町全体が大学のキャンパスであるという、この連携によって提供された恵まれた環境を大学・学生は大いに享受すればよい。

そして、このような連携をすることで互いに現場で学びあい、そして、その力が数倍の力になり、町にも、大学にもその効果をもたらすことが考えられる。とくに学生にとっては、実学を学ぶことは現実とは遊離しないものとなり、卒業後のリアリティーショックの予防になることも、十分に考えられる。

そのためには、我々は、住民にためぬ理解を求め、あらゆる面で、発達途上の学生への教育に関与、支援を求めることが重要である。大学の立場から論じれば、地域全体で大学の学生を教授する姿勢が、この連携で目指すべきものであろう。

1町1大学という恵まれた物理的環境条件の中で、相互にコミュニケーションを十分

に図りながら、学生の教育に全力を注ぎ、また、卒業後の学生も、それぞれの自分の郷里で、次世代を地域で教育するという役割を担うことが、実際の地域連携という学問を生かすことになる。

また、「健康科学大学 地域連携講座」の設置について、平成21年度は個別的な唐突感はあるが、町の積極的な後押しもあり、試行的に実施された。しかし、平成22年度に入り、「包括連携協定」の中で、連携への取り組みが町全体的に拡大し、また大学も全学科で対応することとなり、連携の枠組みが大きく発展していった。

## 2) さらに進んだ学びの共有

町が主催する「連携講座」の充実はもとより、大学主体の講座も必要であろう。そのため、平成23年度より、さらに大学が新講座「地域連携の理論と方法」を開講し、町の各担当者が、現場での実際を、教員とともに教授する予定である。受講する学生達も富士河口湖町の持つ社会資源を実際に見ることにより、身近な行政と大学のかかわりを学び、日本での医療・福祉が実際の地域社会の中でどのように展開されているか、を自分達目で実際に確かめることが出来る講座となった。その中では、多くの現実の困難さやその解決策を学び、学生は自分達の未来での問題解決の糸口を見つけるであろうことが期待される。町と大学と双方に講座を持つ事例は、日本の大学教育でも類をみないものである。このことについては、今後は、もっと多くの人々から意見をもらい、町が大学に期待することを踏まえ、大学は自分達ができる「地域連携」の意味を模索することが必要であろう。

## 3) 大学の今後の在り方

富士河口湖町との会議の中で、町長が述べられたように、町を大学のキャンパスとして多くの学生が学んでほしいという好意を享受し、学生は多くのことを町から学び、同時に多くの保健・医療・福祉の現実、困難さを学び取り、目指すべき自分達の未来の福祉社会の構築の一助になれば、幸いである。

確かに、地域に密着した大学のあり方は、純粋な学問を求めるものにとっては、少なからず不満もあるであろう。しかしながら、何のための学問か、と近年は厳しく問われている時代である。学問が実践に役に立つものであるべきなのは言うまでもないが、同時に大学の目指すことは、新たな価値の創造・開発という重要な使命を果たすことである。

この「包括連携協定」の意味するところは、重い。この重さをしっかりと大学は受け止め、現実の地域保健・医療・福祉の向上に役立て、未来の連携社会の構築を期待されていることを忘れてはならない。

## 6 終わりに

時代が推移し、それぞれの組織や考えに変化することがあったとしても、地域を無視

しての大学教育は成り立たないのが現実であろう。ここで「地域包括連携」までの道のりを記録としてまとめておくことは、富士河口湖町に位置する当大学としては重要な意味があり、それが初期に任じられた地域連携推進委員会の役割でもあろうと考える。

今回、この地域連携には、町からは、町長を始め、多くの要職の方々、町の職員の方々、大学のほうは学長始め学部長、学科長とそれぞれの組織で構成された官民共同の組織連携である。個人の力は小さく単発である。しかし、個人が組織を基盤にすることにより数倍の力が得られる。大学と町の双方の共同企画の実践は、今後の連携の第一歩が開かれたものと考ええる。

現代社会において、人・経済・資源・情報という連携のための4本柱が重要なことはもちろんであるが、連携推進のためには、もちろん、専門の職員が必要である。しかしながら、現状においては、教・職員が兼務することがやむをえないとしても、今後は町との交渉をよりスムーズに行うためには、専属職員が必要となるであろうことを付け加えておきたい。

最後にこの報告書作成に当たり、富士河口湖町の職員・町民の皆様に、紙面を借りて厚く御礼を申し上げる次第である。

## 参考文献

---

- 1) 平成20年度文部科学省白書 文部科学省／編集 佐竹印刷 2009年7月
- 2) 平成22年度「広報 富士河口湖町」4月から10月号 富士河口湖町企画課 山梨県富士河口湖町役場

## 写 真

---

- 1) 富士河口湖町・健康科学大学 調印式
- 2) 植樹祭
- 3) 学生ボランティアのかかわり
- 4) ウォーク・クリーニング
- 5) 西湖ロードレース



富士河口湖町・健康科学大学 調印式



植 樹 祭



学生ボランティアのかかわり



ウォーク・クリーニング



西湖ロードレース



## Abstract

Recently, community development has seen joint efforts from both public and private sectors. One example of such an endeavor is the collaboration among universities and communities. Such collaboration is expected to be a powerful force in improving research and education, boosting local industries and energizing the community as we have seen in ‘machizukuri - the regional development.’

Individual instructors and departments at Health Science University (HSU) have been participating in various collaborative activities with Fujikawaguchiko town. Such relatively small, intermissive, and individual activities have now grown into larger scale comprehensive collaboration: Fujikawaguchiko town and HSU have reached an agreement on the university-community collaboration. The town suggested that HSU students regard the town as an extension of their campus, and learn various things from it. Reaping benefits of this suggestion, HSU encourages their students to learn various things in the real world, thus developing a realistic perception of welfare society, and considering issues and difficulties in the field of rehabilitation, medicine and welfare. In return, it is hoped that these students will contribute to building a desirable community in the future. In general, one essential role of the university is to provide learning opportunities so that students will be able to apply their acquired skills and knowledge to society. Another important role is to create or develop new values. Based on such an ideology, the committee for promotion of community collaboration will define the developmental process of the collaboration and identify roles of the university in the community.

Keywords : open courses offered by the community collaboration  
agreement on community collaboration  
the committee for promotion of community collaboration  
roles of university in community